
悪女は何を狙う？

えみりあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪女は何を狙う？

【Zコード】

Z4970Z

【作者名】

えみりあ

【あらすじ】

突然亡くなつた祖母「和泉花枝」。その祖母が残した莫大な遺産は孫3人で争うことになった。周りは敵だらけ。何が何でも遺産全てを相続したいとたくらむ椿は、自分を慕う者をうまく利用することを決めた・・・！？

登場人物

和泉 椿【いづみ つばき】

19歳。誰もが振り向く美人というわけではないが、整った愛嬌のある顔。

椿、董とはいとこにある。
自分の使い方、周りの動かし方を理解している若き策士。
周りのことには聰いが、自分のことに関しては疎い。
祖母花枝の遺産に関しては、何が何でも自分のものにしようと企んでいる。

和泉 桧【いづみ ひいらぎ】

23歳。美しい、世に言う「美形」の顔をした青年。
椿、董とはいとこにある。
幼い頃から椿のことを想っている。
花枝の大事にしていた遺産の内の会社だけは何とか自分の物にしたいと思っている。

吉志 董【きし すみれ】

23歳。清楚な美しさを持つ美人。
椿、桜とはいとこにある。

幼い頃から桜を想っており、その桜が想う椿を少し疎ましく思つ。出来れば花枝の残した遺産は自分の物にしたいと思っている。

小野 直樹【おの なおき】

27歳。秀麗な顔をした青年。
父親から弁護士事務所を引き継ぎ、和泉家の顧問弁護士となつた。
自分に頼つてくる椿のことを想つてゐる。

和泉 花枝【いづみ はなえ】

70歳。
椿、柊、董の祖母。
女手一つで子どもを育て上げ、若くして亡くなつた夫から引き継い
だ会社を一代で大きくした。

1) 遺産相続

「これから、貴女様には遺産争いに参加していただきます」

いつでも冷静沈着な顧問弁護士が、苦々しげな表情をして私にその悲報を伝えた。秀丽な顔は、どんな表情をしても美しい。これは神様を恨むしかあるまい・・・。

「これは花枝さまの決定です。どうか抗うことはなさらないでください」

そこで祖母の名前が出てくるとは思わなかつた。祖母は体は弱いが、その分勝気な強い性格をしている人で、遺産の話をこんなに早く持ちだしていくとは思わなかつた。

「分かつてます。しょうがないことですから」

随分前からその話は身内の間で持ちあがつていた。祖母である花枝は、まだ現役で会社の経営に携わつており、「遺産」という言葉の「い」の字も口に出したことは無かつた。だから、どうなるんだろうと身内の間では話題になつていたのだつた。

「他の方々にはもうお会いあります。皆様、本家の方に集まつてあります」

私が遅れてしまつては話し始められないだろう。意地の悪い親戚どもは、口々に私の両親を責めるに違いない。

少しでも急いでいると、タクシーの運転手に「急いでください。」と口早に頼んだ。

2) いじにはライバル！？

「皆様、お集まりいただけましたね」

広いリビングには親戚一同集まっていた。一番遅くに駆け付けた私のことを、さつて目つきで見てくる。

「誰かさんは一番遅くに来たけどね～」

私と一番年齢の近い従姉が嫌みな言葉を私に放つ。彼女の名前は董。董の花言葉「慎み深き」とは全く異なった性質を持つ女だ。見た目は清楚な美女なのに、全く中身は違う。

「そう責めるなよ。椿だって、大学があつて忙しかったんだから」

私を庇ってくれたのは従兄の椿。彼は昔から私に優しかった。幼心に、椿は私のことを好いてるのではないかと思つたほどだ。

「そんなことを言つたら私、だつて仕事があつたのよ。それでも一番最初に来たわ」

「仕事と言つても、彼女の父親の会社で受付嬢をしているだけだ。そういう難しい仕事ではない。いつでも抜けて出て来れるような楽な仕事場。

「すみませんでした。少し、道が混んでいたので」

「気をつけなさいよね。椿さん?」

「一ヤ一ヤと真っ赤な唇を二日月に歪ませた董は、ただのそらへんの娼婦にしか見えなかつた。

「では花枝様、お願ひします」

陰険な雰囲気を切り裂くように、小野が横から割つて入ってきた。

70代には見えない若々しい祖母。これで女で一つで子どもたちを育ててきたというのだからすごい。それに加えて一代で会社を大きくしたのだ。

「私も最近、病状が酷くなつてきた。だから私の遺産を相続する者を決めたいと思う」

その言葉に嬉しそうな表情をする親戚一同。特に、祖母の子供である、董の母親、柊の父親、私の父親は勝ち誇ったような顔をしている。相続するのは自分だとでも言いたいのだろうか。

「董、柊」

呼ばれたのは「と」とこの名前。

「それに、椿。前へ出なさい」

辺りがシンと静まりかえった中で呼ばれた自分の名前。それは、ずいぶん不気味に聞こえた。

周りが一番後ろに座っていた自分のことを振り返つて見つめる。隣に座る父親に、「前へ出なさい」と言われ、バクバクと鼓動する自分の胸を押さえ、一歩ずつ足を前に進める。

「この子達が私の遺産を相続する可能性のある三人だ」

その言葉を聞いた一人が立ち上がり、異議を唱える。

「いくらなんでもそんなに若い子なんて……！椿なんて、ま

だ20歳にもなっていやしないですかー」

「私は一族の中でも血の濃い三人を選んだ。私の直系の孫だ、相応しいだろ？これから和泉の家を背負っていくんだ。若い子の方がいいだろ？」

凛として答える祖母。その言葉にはよどみなど無く、異議を唱えた方も言葉に詰まり、引き下がった。

「可能性があるとは、どうこう」とですかお婆様？」

猫なで声で訊ねる董。彼女の中では自分が遺産を相続することが決定しているのだろう。

「この三人で遺産相続を賭けて競つてもらう。勝利した者が【和泉】の家の全てを継ぐんだ」

周りがざわつく中、私の頭の中はおかしくらいに冷静だった。

3) 決意

競い合い発表から一夜明けて、ある者はそれを考へ出した和泉の家の現当主、花枝にどういうことかと怒りをあらわにし、ある者は勝利する可能性の高い23歳組（柊・董）に媚を売ることにいそしむことにしたようだ。

「私が勝つ可能性は無いって、思つてんの？」

まあ、分からなくもない。19歳の小娘と23歳の大人だったら、どちらが勝つかなんて一目瞭然。

「でも、勝つのは私」

そろそろ飽き飽きしていた頃だ。この人生には、この【和泉】の家は、私にとつて甘くはなかつた。いつでもどろどろしていて、誰が祖母の遺産を相続するだとか、そういう話ばかり。その魔の手は私にも忍び寄ってきて、しかも絡みついたら離そうとはしなかつた。

私の父親は、祖母花枝の次男である。幼い頃はさほど生活が豊かでは無かつたため、甘えたお坊ちゃん気質に育たなかつたのが幸いだ。祖母から譲り受けた子会社を自分の力で軌道に乗せた。そこを祖母

は大きく評価していたようで、長男よりは遺産を相続する可能性は高いと周囲からは言われていた。

だからこそ、柊の父親、董の母親からは敬遠されていた。それは私も同じようで、特に董の母親は私のことを毛嫌いしていた。娘の董も同じようだ。

でも、柊は違っていた。もつとも忌むべき存在の私に幼い頃から異様に優しかった。いつでも私の傍にいて、いつでも助けてくれた。それはもう、世に言つ「アッサー君」と言つてもいいほど。

「終わりこしよう」

この19歳の小娘にも優しくない世界を。

私が勝利して遺産を相続することとなつたら、もう何も言わせない。

幼心に傷ついた、その復讐も兼ねられる。

周囲からの圧力や、酷い言葉。

「ありがとう、花枝おばあちゃん」

絶好のチャンスをくれた祖母に感謝を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4970n/>

悪女は何を狙う？

2010年10月14日22時43分発行